日曜随想　弘大の強み

暮らすことを誇れる街

先日ふと目に留まったのは弘前大学の学生募集だった。リンゴ畑にひとり立つ女子学生、その脇に『学ぶ街は、暮らす街でもある。』と見出した一文が添えられる。純朴なモチーフながら、リンゴとブラウスの深い赤色が畑の緑に映える。そして何よりも私自身がこの街で過ごした経験から、キャッチコピーにこれぞ、と膝を打ち、感慨ひとしおだった。

制作を担当したのは、友人でデザイナーの木村正幸さん。そしてコピーライターは私の学部時代の先輩、川村伸さんだ。ともに弘大の同窓である。木村さんにこの話題を向けると、こんな話を聞かせてくれた。

進路に悩む若者たちに弘大の魅力をどう伝えるか。強みは何かと考えてみたら、ずば抜けた学力を誇れる訳もなく、ありきたりの明るい学生ライフでもない。意外なことに、それは学生たちが弘前の街に住むことに誇りを持っているということだったそうだ。親元を離れて暮らす学生ならば、桜の時期やねぷたまつりには必ずといっていいほど家族や友人を呼び寄せる。だが美景や風情の要素だけではないはずだ。暮らしやすさだけでも住むことをわざわざ誇ることはない。弘前の街はいろいろな要素が絶妙に積み重なり、そこに住んでいることを胸張って人に伝えたくなる場面があるような気がする。さらに昔に比べて、街のさまざまな活動に積極的に関わりたいと望む学生が増えているという。

25年も前のことだが、私自身が先取りしてそのようであったことを思い出す。当時は街と関わることなど学内でも、街の側でも変わり者と思われていた時代だった。そうしたなか、ゼミの課題で茂森町のねぷた会や消防団に飛び込み、街の人々の営みにほれ込んで通い詰めた。研究対象にとどまることなく、街との関係はその後もますます深まった。暮らす街から学んだものは数多く、この上ない人生の糧を授かった。学ぶ街は暮らす街でもあり、誇れる街でもある、本当にそう実感した。

〝学生の街〟と呼ばれる駅や地域は都会にもたくさんあるが、弘前のように学生たちが暮らすことを誇れる街はそう多くはないはずだ。観光地でもある歴史や自然の魅力に加えて、大学が郊外移転することなく街なかに踏みとどまったこと、徒歩や自転車で事足りる程よいサイズ感、さらには市民が数多くの学生たちと長らく接してきた経験の蓄積が、あの強みを伝える一言に凝縮されていると感じる。

コロナ禍によって社会情勢が変化し、家計負担の問題などから、進学先を考える上での東京偏重の傾向は変わっていくかもしれない。そうした将来、少子化がさらに進むなかにおいて、学生を迎え入れるこうした街の包容力が、大学の付加価値を高める重要な要素となるだろう。

（オフィス「オリゾンテ」代表　田村昌弘）

2020・12・13

陸奥新報
2020年12月13日(日) 5 面掲載

※この記事は陸奥新報社の提供です。
※この画像は、当該ページに限って陸奥新報の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにこのページへのリンクは難くお断りします。